

ナラティブ・ガイドによる語りと文化の再構築  
—中山道（木曾路）における語りの実践を事例として—  
【 要 旨 】

ソーシャル・イノベーション研究科  
ソーシャル・イノベーション専攻  
2026年3月修了  
丸山 信人

## 【 要 旨 】

本研究は、地方観光において長年指摘されてきた“通過型・消費型観光”からの質的転換という課題に対し、ローカル・ガイドの語りの実践に着目することで、観光を通じた地域文化の再構築のあり方を明らかにすることを目的とする。対象地域として、長野県木曽地域の中山道（木曽路）を取り上げる。

本研究における文化は、芸術や伝統芸能に限定されるものではなく、地域社会が長い時間をかけて育んできた暮らしの営みや価値観、記憶の総体として捉えられる。その上で、地域文化の再解釈と価値創造に深く関与するローカル・ガイドを“ナラティブ・ガイド”と位置づけ、観光者と地域社会との相互作用の中で文化がどのように再構築されていくのかを検討する。

研究方法として、木曽地域を拠点に活動するローカル・ガイドのマイケル・キング氏を主な事例とし、事前アンケートおよび半構造化インタビューによる質的調査を実施した。分析にあたっては、ガイドの語りの内容や構成に加え、地域住民との関係性、歩く旅と対話を通じて生成される経験のプロセスに注目した。

分析の結果、ナラティブ・ガイドは、地域の歴史や暮らし、人々の記憶を単なる情報として提示するのではなく、それらを物語として語り直し、旅行者との対話を通じて新たな意味づけを行っていることが明らかとなった。この語りの実践は、旅行者の地域理解や愛着を深め、文化を一方向的に消費する観光から、地域社会と共有される文化へと転換する契機となっている。ナラティブ・ガイドが語りを一方向的に提供する存在ではなく、相互行為によって立ち上げる存在であることを示す。

さらに、熊野古道や四国遍路との比較、遍路宿研究や実践共同体論を参照することで、ナラティブ・ガイドの語りや、あらかじめ完成された物語を提供するものではなく、歩くことや対話を通じて経験の意味が生成される構造をもつことを示した。とりわけ四国遍路における“同行二人”の思想は、旅の形式そのものが遍路者の内面に働きかけ、意味生成や自己理解を促す点で、ナラティブ・ガイドの実践と構造的な共通性を有している。

以上の分析を踏まえ、ナラティブ・ガイドの持続的な育成と実践環境の整備に向けた提案を行う。文化の保存にとどまらず再構築に関与するガイドの育成には、知識や話術の習得だけでなく、地域理解への姿勢、他者と共感する力、語りを物語として構成・編集する力、対話を通じて物語を共に生成する力、そして学び続け協働する姿勢が重要であることを指摘する。これらは非形式的な学びや協働的实践を通じて培われるものであり、ナラティブ・ガイドの持続的育成に対する実践的示唆を与える。

以上より、本研究は、ナラティブ・ガイドの語りの実践を通じて、通過型・消費型観光からの質的転換の可能性を示すとともに、ナラティブ・ガイドを媒介とした地域文化の再構築のあり方を再考する視座を提示するものである。